中嶋は川の中島にありたるを以って名とせしと云う。

（大正2年6月編纂「一日市村郷土誌」）

2. なかじま

川の中の中州を(川)中嶋といった。ここは馬場目川が流れていた。その後、地震による隆起や堆積物で三日月湖となった寺沼、八幡沼に挟まれた土地だった。明治末期の地図や大正14年の地図(一日市町振興会発行の案内書)を見ると、中嶋の周囲を水路が囲んでいた様子が良く分かる。昭和20年の一日市大火の後、沼の埋め立てが急速に進み、周囲の水路はその面影を消した。

3. なかじま

一日市の潟の方に**中嶋**という地名があるが、あそこは島で少し小高かったらしい。**蒲沼**(がまぬま)だとか、周りには沼があって、その中で島になっていた。それで中嶋という名が付いたと聞いている。

（1998/7　中羽立　村井酉二郎氏　談）

4. なかじま

寛永3年(1626)頃夜叉袋の百姓長左衛門以下の衆が水路開削を企画し、清源寺住職光山和尚の援助を得て、当時指紙開の特権をもっていた戸村十太夫の許可と援助のもとに、五城目村内の馬場日川から分水し、夜叉袋に至るまでの土地に引水することに成功した。これによって新田開発は進み、一日市村支郷中島村など新村も成立した。

（1980.3出版　角川日本地名大辞典　5　秋田県）

なかしまだ

八郎潟町　夜叉袋　**中島田**(なかしまだ)

「ナカ」は幾つかの新しくできた村や田畑の元の位置という意味と、それらの中心という意味がある。

「シマ」には島、国、故郷、領地などの意がある。

「田」は田圃の他に土地という意もある。

吉田東伍氏は「シ」は巣、栖(すみか)のこと。「マ」は所のことだという。つまり居住地と解して良い。

（1987年三浦鉄郎著「新編・秋田の地名」）

なかた

八郎潟町　**中田**(なかた)

駅前周辺は字中田で（中略）もと胆煎(きもいり)（部落長、村長）畠山善太郎氏所有の作物自由試験場であったところに設置されたもので、地番は中田58-2であり明治35年10月1日に開業された。

（畠山四郎「地名と歴史1ふるさと散歩105」八郎潟町広報）

ながぬま

八郎潟町　**長沼**(ながぬま)

なかはだち

八郎潟町　夜叉袋　**中羽立**(なかはだち)

「中羽立」、「下羽立」は八郎潟湖畔沿いの夜叉袋の支郷で、新田開発地名である。「ハダチ」は、津軽地方に多く分布する。「羽立」は秋田県には青森県に多く分布する。親村から分出した地名のことで、新田開発用語である。

（1987年　三浦鉄郎著　新編・秋田の地名）

2. 羽立

近世秋田藩の新開墾地の名称で、意味は動詞のハダツ（始める、着手する）の連用形である。現在5万分の1地形図には、羽立（男鹿市、昭和町、天王町）と中羽立（天王町）の4集落である。

（秋田地名研究会会報28号　渡部　景俊）

3. 羽立

開拓地名としての「羽立」地名は小字としては多数存在するが、大字はかつて能代港町（能代市）